

第三者意見



ヴッパータール研究所
持続可能な生産・消費部門
www.wupperinst.org
プロジェクト・コーディネーター
フィル・ユストウス・
フォン・ゲイブラー氏

持続可能性は今日ではビジネスの責任といえる

米国でのドナルド・トランプ氏の大統領就任や英国でのEU離脱投票などに見られる今日の地政学的混乱は、グローバル化の構造の変化を伝えています。経済成長の鈍化や多くの人々が抱く世界経済への不信感の増大が、ナショナリズムや孤立主義を助長しています。このような状況下では、公共政策立案に携わる者が、グローバルな持続可能性に対する強いインセンティブを設定することは困難になります。かつてないほど、社会のあるべき姿を積極的に形作り、民間セクターの貢献を明確に示していくことが企業の責任となっているのです。社会的要請に対応していくこと、主要なステークホルダーと協力していくことは、革新的な企業の成功にとって重要であり、特にキヤノンのようなグローバルに技術を提供している企業においては言うまでもありません。

キヤノンはどのように人々や社会に応えるのか？

こうした観点から、キヤノンの2017年版サステナビリティレポートの草稿を検討したところ、本年度のレポートの品質に対する私の総合的な評価はとてもポジティブです。報告プロセスでは、「単なるパフォーマンスの提示」にとどまらず、環境や社会の動向をよりよく理解するために、人々や社会の声を「聴く」という行為が含まれていることをキヤノンは報告書で示しています。その結果、2017年版レポートでは、関連する課題に焦点をあて、実績については持続可能性の課題やインパクトをより広い文脈で提示することができています。挑戦すべき課題はまだ残っているかもしれませんが、本年度のレポートは、前回のレポートと比較して、2つの点で特に重要な達成が見られたことを強調しておきます。

キヤノンとSDGsとの関係についての考察

2017年版のレポートでは、キヤノンの活動と国連の持続可能な開発目標（SDGs）との関係についてより深く掘り下げて説明していることを大変好ましく思っています。例えばステークホルダー調査においてSDGsの達成のためにキヤノンが成すべき貢

献について尋ねています。（「CSRマネジメント」→P10）。大型買収（→P3）などの昨今のキヤノンの主だった変化を考えれば、「従業員のエンパワーメント」「生産的な雇用とディーセントワーク」ならびに「包括的かつ公平な質の高い教育」をステークホルダーがキヤノンの取り組むべき優先的テーマとしてあげるのは、当然のことだと理解できます。これに加え、P25、P26では、キヤノンの活動とSDGsとの関係性を取り上げ、さらにCSR活動報告セクション「環境」（→P35）では、環境関連のSDGsとの関連性を特定しています。今後のレポートでは、SDGsとの関係性がマトリックスやパフォーマンスデータ、特に社会への影響に関するデータにより裏付けられていることを示してほしいと思います。

このほか、SDGsに関連するリスクと機会の双方を考慮することは、将来のマーケットをよりよく理解するのに役立つと思います。キヤノンは、例えばWBCSD（持続可能な開発のための世界経済人会議）のSDGビジネスセンターのような、現在進行しているSDGsに対する企業行動に関する議論について、どのような結果になるのかも考慮しておいたほうがよいと思います。

経営戦略を従業員の視点で考える

利益創出や事業活動、さらには企業そのものの存続をも意味する「価値創造」は、キヤノンが社会に及ぼす影響の中でも非常に重要な側面の一つです。2017年版のレポートでは、新たな成長戦略をサステナビリティの文脈で適切に説明していると思います。レポート全体を通じて、特に「トップメッセージ」「CSRマネジメント」「成長戦略とサステナビリティ」で顕著ですが、中期経営計画「グローバル優良企業グループ構想」の新たなフェーズと4つの新しいコア事業の立ち上げについて述べられています。このことは、キヤノンの従業員でなくとも、キヤノンの変革プロセスとの関連性をよりよく理解するために、非常に重要なことです。この点において、今回「CSRマネジメント」セクションで紹介されている新しいCSRトレーニングや教育活動が今後も拡大していくことを期待しています。

レポートの品質の飛躍的な向上

私は10年以上にわたり、キヤノンのサステナビリティレポートの品質が継続的かつ印象的に向上する姿を見てきました。キヤノンおよびレポート制作チームはよい結果を出すことができたと思います。キヤノンにはレポートをさらに向上させ、パフォーマンスを継続的に前進させる力が備わっていると思います。

第三者意見書のプロセス

キヤノンは、ステークホルダーの皆さまに向けてサステナビリティレポートを長年にわたって発行し続け、報告のアプローチやステークホルダーとの関係を向上させてきました。2003年からは、外部のコメンテーターにサステナビリティレポートの評価ならびに第三者意見の提供をお願いしています。このプロセスは、信頼性の高い第三者から有意義なフィードバックを提供していただくことによって、キヤノンが国際水準の活動ができるようになることをめざしています。

2008年よりヴッパータール研究所に所属するフィル・ユストゥス・フォン・ゲイブラー氏にコメンテーターを担当していただき、報告書を作成するプロセスにおいて、テレビ会議や意見書などを通して、アドバイスをいただいています。情報開示や企業パフォーマンス、ステークホルダーとの関係について討議する本ダイアログは、キヤノンのステークホルダーエンゲージメントの基盤となっています。

コメンテーター意見の基準

この9年間、コメンテーターに対しては、報告内容の評価にあたって、グローバル・レポーティング・イニシアティブ(GRI)の「サステナビリティ・レポーティング・ガイドライン」に示された以下の4つの「報告書内容の確定に関する報告原則」に従うようお願いしています。

- **重要性**：レポートは、キヤノンにとって重要な経済的、環境的、社会的な課題を反映しているか
- **ステークホルダーの包含性**：レポートは、キヤノンがステークホルダーの期待、関心にどのように応えているかを説明しているか
- **持続可能性の状況**：レポートは、広範なサステナビリティ課題・影響から見たキヤノンのパフォーマンスを説明しているか
- **網羅性**：レポートは、キヤノンのサステナビリティ面への影響を反映し、読者が同社のパフォーマンスを評価するのに十分な内容を網羅しているか

フォン・ゲイブラー氏はこれらの原則に従い、キヤノンのレポートが彼らの期待にどの程度応えているかを、以下の点から評価しました。

- 「キヤノンサステナビリティレポート2017」に掲載されている項目の妥当性
- レポートにある個々の掲載内容の質
- レポート全体の質、バランス、関連性

サンクロフト・インターナショナルとそのチーフ・エグゼクティブであるジュディ・クチェウスキ氏がファシリテーターを務めています。クチェウスキ氏は、コメンテーターへの委託条件の確認やキヤノンとコメンテーターとの間のコミュニケーションの仲介、第三者意見のレポートでの記載方法などの点で、キヤノンに助言や支援を提供しています。クチェウスキ氏および外部のコメンテーターは、見識ある独立したサステナビリティの専門家としてキヤノンの活動に強い関心を持ち、レポートの透明性、説明責任向上への支援を行うものであり、レポートに掲載された内容の「保証」を行う立場にはない点をご了承ください。

トップメッセージ	キャンングループのビジネス	CSRマネジメント	成長戦略とサステナビリティ	活動ハイライト
SDGsとの関連	CSR活動報告	マネジメント体制	GRIガイドライン対照表	第三者意見・保証

コメンテーターとの討議内容

キャンノンとフォン・ゲイブラー氏はテレビ会議を通して、レポートへの期待や主な関心分野、レポートに対する印象などについて討議しました。

主な議題は、以下の通りです。キャンノン側の討議参加者の回答や見解もあわせて示しています。

下記に加えて、言語、写真、およびグラフィカルな要素を通じて、キャンノンのSDGsへの寄与や複雑なアイデアをどうよりよく表現するかについての広い議論がなされました。

フォン・ゲイブラー氏の意見全文は、「第三者意見書」(→P142)に掲載しています。

議題	第三者意見	キャンノンの見解
マテリアリティの妥当性	キャンノンの2つのマテリアリティは全体として粗く一般的過ぎる。この2つの包括的テーマのもとで下位のテーマとなるものをどこかで明確にすべきだ。	過去2回のアンケート調査でもこの2つのマテリアリティについてはキャンノンに適しているという意見が多い。環境についてはより詳細なマテリアリティを設定した。また、今年は、2つのマテリアリティに加え、昨年のダイアログでフォン・ゲイブラー氏から提言があった「人と社会への配慮」というキーワードをサステナビリティ戦略の体系図の中で言及した。
キャンノンのサステナビリティ戦略とSDGs	キャンノンのサステナビリティ戦略と企業理念の「共生」との関係性をP11、P12の図で明確にしたのはとてもよい。同様にSDGsとの関係も同じ図で明確にした方がよい。キャンノンがSDGsに貢献していることは明白であり、それが包括的に示せるとよい。	一つのページで情報過多になってしまう懸念がある。そうなると読者も内容を消化できない。キャンノンの活動とSDGsとの関連は別ページで示す。SDGsが公表されてからまだ2年に過ぎないため、今年は関係図を示すにとどめる。キャンノンは直近のステークホルダーアンケートでSDGsへの興味についても調査した。
資源循環型経済	高品質で修復可能な製品を長寿命で提供することは、お客さまが環境負荷を低減するのを助けるというキャンノンのコミットメントの上で重要な要素である。	キャンノンは、使用済み製品を、新品と同等の品質・信頼性を持つ製品に生まれ変わらせる「リマニュファクチャリング」を行っている。この取り組みが、製品のライフサイクルを延長することに貢献していると考えている。
生物多様性	私は、キャンノンが写真や映像の美しさを通じて人々の心に働きかけ、自然の価値を示すことによって、生物多様性の保護を支援するユニークな能力を持っていると考えている。映像機器会社としてのキャンノンの役割は、感情に直接語りかける方法で人々を自然保護と結びつけることである。	キャンノンの生物多様性方針には3つの柱がある。1つ目は、生物多様性保全への自社技術・製品の活用。2つ目は、事業所における生物多様性の配慮。3つ目は、地域社会やNGOとのパートナーシップによる、生物多様性を育む社会づくりへの貢献である。この1つ目の柱に基づく取り組みにより、映像を通して自然の重要性や美しさを伝えることに貢献できると考えている。

サクロフト・インターナショナルについて

サクロフト・インターナショナルは、ジュディ・クチェウスキ氏がチーフ・エグゼクティブを務める、環境および社会的パフォーマンス改善のための世界最大のサステナビリティコンサルタント会社です。サクロフト・インターナショナルは、サステナビリティ戦略、倫理的貿易、人権、サステナビリティレポート、およびステークホルダーエンゲージメントなどについて助言しています。またクチェウスキ氏は、サステナビリティレポートに関する国際ガイドラインのGRIが設立した独立基準設定機関、グローバル・サステナビリティ基準審議会(GSSB)の議長も務めています。